

# レンズを通して

連載

十月

写真・文 高円宮妃久子殿下

## チヨウゲンボウ

ハヤブサ科 雄 全長33cm

極地を除くヨーロッパからアジアとサハラ砂漠以外の  
アフリカに分布。日本では北海道から本州中部の崖地、  
社寺林の樹洞などで繁殖。空中で停止飛行し  
餌を見つけては急降下して捕える。  
農耕地や河川敷のハタネズミやバッタなどが主食。



# チョウゲンボウ

## 変化する人との共存関係

写真文 高田宮妃久子

私は猛禽類がとても好きです。その視力の良さや空から急滑降するスピードに驚嘆するとともに、狩りに失敗して残念そうに飛び去る姿や仕留めた獲物をうっかり落としてしまった瞬間を見ると、愛おしくも感じます。私が一番好きな猛禽類の姿は、高い空から地上を見渡している時。頭を傾け、獲物の僅かな動きも見逃さないように神経が行き届いた姿には、こちらまでドキドキしてしまいます。

長野県中野市に十三崖という国の天然記念物に指定されたチョウゲンボウ集団繁殖地があります。チョウゲンボウはハトサイズの小型の猛禽類です。昭和28年当時、夜間瀬川をのぞむ高さ約30メートルにそびえ立つこの崖に、チョウゲンボウが20つがいほど営巣していたといわれています。しかし、時代とともに十三崖は周辺を草木に覆われてしまい、チョウゲンボウの営巣に適した環境ではなくなりました。そこで、平成18年に地元中野市が長野県、文化庁、そして国土交通省と協力しながら、チョウゲンボウの集団繁殖地の回復を目指した環境整備事業として、崖上の樹木の枝下ろし、崖面の灌木、下草、ツタなどの刈り払いを行ったそうです。その結果、十三崖の景観は以前のようになり、チョウゲンボウが営巣地として利用できる環境になりました。

野生生物はお互いの競争を避け、繁殖の成功率を高めるため、それぞれの環境に適応していきます。同じ種でもその習性は地域によって少しずつ異なります。十三崖のようなチョウゲンボウの集団営巣地は世界でも珍しく、是非ここで繁殖してほしいのですが、年々繁殖個体数が減少し、一昨年と昨年は営巣がありませんでした。ハヤブサが近くで営巣したこ



とや、崖周辺の環境が変化したため餌となるハタネズミが近くで捕獲できないことなどが理由として考えられます。しかし、今年はずつがいが繁殖。無事に雛が巣立っていききました。十三崖での営巣は3年ぶり、2つがいの繁殖成功は4年ぶりだそうです。

十三崖が指定された当時、チョウゲンボウの生息数は全国的に少なかったのですが、

今は違います。人が危険な存在でなくなるにつれ、猛禽の中で最も体が小さく弱い存在であったチョウゲンボウは、市街地のビルや橋などの人工構造物に営巣し、人の近くにいたりにより生息数を増やしてきたのです。平地で数を増やしたチョウゲンボウが現在では夏に高山帯に侵入し、ライチョウの雛の捕食者になってしまったと聞きます。チョウゲンボウには本来の営巣地、特に十三崖に戻ってほしいものですが、これこそ、鳥と人、そして異なる鳥の種同士の共存関係と環境への適応が時代とともに変化している顕著な例とも言えるでしょう。

何かあるべき環境なのかを考えると答えはひとつだけではないように思いますが、どの時代においても、人間だけの目線で見ているとはいけないという事だけは確かかなようです。

(写真上) チョウゲンボウ ハヤブサ科 雄 33cm  
最近ではビルや橋げたの穴なども利用して繁殖する。  
冬は全国各地で見られる猛禽。この雄は多くの車やトラックが通る橋の横でたつぷりと時間をかけて羽繕いをしていた。  
(写真下) 長野県中野市。右側にそびえ立つ十三崖は、天然記念物に指定されているチョウゲンボウの集団営巣地。







チョウゲンボウ ハヤブサ科 雄33cm 雌38・5cm  
ハトと同じくらいの大きさで、よりスマート。長めの尾羽の  
上面が灰青色は雄、茶褐色は雌。十三厘で雌を撮影していたら雄がやってきた。  
翼を大きく広げ、上手にバランスを取りながら交尾。